

ドゥルーズ／ガタリはハイデガーをどのように読んだのか。これを検討するのが本発表の目的である。こう述べると少なからず疑問を抱かれるかもしれない。なぜなら、ドゥルーズ／ガタリは、レヴィナスやデリダなどと異なり、ハイデガーに関する著作もないどころか、ハイデガーを主題とする論文さえ残していないからである。とはいえ、若き日の小論から主著、そして最晩年の著作に至るまで、彼らはその端々でハイデガーに言及している。たとえば、自他ともに「哲学すること」を試みた最初の本とみなされている『差異と反復』において、冒頭でまっさきに言及され、本論の核心的部分で注記として補論され、さらに掉尾で批判的に検討されるのがハイデガーである。また、ウェブ限定で公開されている講義録や *Dosse* による評伝を読むと、書かれたものからは窺い知れないほど持続的に彼らがハイデガーへ関心を寄せていたこともわかる。そもそも、3Hの哲学（ヘーゲル、フッサール、ハイデガー）の影響が濃厚な50年代フランスの知的環境で学生時代を過ごし、続いて訪れたラカン・ブームを直接的に経験した彼らが、ハイデガーと無縁でいられたはずなどないだろう。

こうした理解の下、本発表ではドゥルーズ／ガタリにおけるハイデガーへの断片的叙述と伝記的事実を交錯させながら、彼らの解釈の要諦を浮き彫りにすることをめざす。具体的な手続きは次の通りである。まず、ドゥルーズ／ガタリに寄り添いつつ、ハイデガーと彼らの存在論の異同について検証する。そしてそれを受け、異同の焦点となる出来事をめぐる両者の言説を吟味する。最後に、ドゥルーズ／ガタリのハイデガー解釈に通底する思考の *fil conducteur* を析出し、それが何をねらっているのかを明らかにしたい。

さっそく『差異と反復』の企図を要約してみよう。同書におけるドゥルーズの試みは、①西洋哲学の「正統」にみられる、同一性や恒常性に真理を見出そうとする態度を「思考のイメージ」の暗黙の了解に基づくものとして糾弾すること、②そうした了解が差異と反復の不可分の連動の軽視や看過に起因するのを論証すること、③その連動の実質を「イメージなき思考」と命名し、そこにはらまれる思考のポテンシャルを西洋哲学の「正統」とは別の仕方で開催することに存している。これは、ドゥルーズ自身も認めているように、ある程度までハイデガーに共鳴しうる身振りといってよい。ただし、ドゥルーズによれば、ハイデガーは差異について慧眼を示しながらも、反復について精察を怠ったため、差異がはらむ異他化の力能を同一ならぬ「同じもの」に

収斂させてしまった。ハイデガーは実際、存在論的差異を二重襞と規定したにもかかわらず、取り集め (Versammlung) という構想に引き寄せられ、それを一重襞に結ぶ [折り畳む] ことに執心してやまない。ドゥルーズはここに、ほかならぬおのれの思考に対して不徹底なハイデガーの姿を見出す。ハイデガーもまた、「正統」とは違うものの、依然として「思考のイメージ」に囚われているというわけである。

そうしたハイデガーの思考がより洗練されたかたちであらわれ、かつドゥルーズ／ガタリとの相違が明示的に考察できるのは、やはり技術論の領域だろう。ハイデガーは技術の本質を Ge-stell ではなく、現実的なものの根本動向、すなわち現前性に求め、それを性起の出来事 (Ereignis) という観点から自然と結びつける。性起の出来事において重要なのは、技術と自然に通底する出来事としての性起が人間に思考を要請することであり、人間がその要請に従って発生論的次元における存在の思考を疎かにしないことである。この性起の出来事は、現前を贈与するものの、それ自体は現前しない限りで「脱 - 」という運動を伴い、いわば根拠を絶えず脱根拠化する。だが他方で、ハイデガーはそこに固有なもの、本来的なもの (eigen) をみようとする。それは必然的に、そのネガである非固有なもの、非本来的なものとのあいだに優劣の線引きをすることになるだろう。

ドゥルーズはハイデガーのそうした傾向への警戒感を隠さない。そこには収斂する限りでの「同じもの」に訴えるのと変わらない思考の枠組みが窺われるからだ。そしてガタリとの協働作業で、とりわけガタリの横断性 (transversalité) という概念を援用しつつ、性起の出来事を領土化の出来事 (événement) によって脱臼させようともくろむ。『千のプラトー』で展開されるその試みは、『差異と反復』で見出された異他化の力能と並行する反実現 (contr'effectuation) としての結晶化の力能に焦点を当て、これら二つの力能のもつ双方向的性格によって、存在者の存在への聴従が存在そのものの生成変化を促すことを主張するだろう。ドゥルーズ／ガタリがそうすることで喚起するのは、存在の折り畳まれた襞をゆっくり開き、「存在よりも深いひとつの所有」に目を凝らし、そこからの逃走線／漏出線を描くことである。